

岩屋山 観音たより

発行所：和歌山県
海草郡下津町橋本一〇六五
福勝寺内
電話 (073) 494-0311
編集人：本多碩峯

激動の二十一世紀を生きる(四)

私達はこれで良いのだろうか！

修行僧・同行二人 本多碩峯

人間はどんなに物質的に豊かでも、心の豊かさがそれについていかなければどうにもならない。昨今は、インターネットによる情報

革命は想像を絶するほど進んできましたが、あまり進んだコンピュータの中で人間の荒(すさ)んだ孤独な心がおきりにされているのが現代の状況である。情報の伝達手段の発達の結果、人と人が顔を見ず、接触することなく、直接、会話を交わすことがなくなつたとき、満たされない生身の人間の心は狂気を帯びてくるのではなからうか。

今は亡き駒沢大学の名誉教授田中忠雄師が「時計の針が進むにつれて、人類が進歩発達している」という考えの人は驚くべき無知である。進歩的楽観主義者に限って社会的抗議運動に躍起になる」と。

もし時計の針が進むにつれて、人類の文化が進歩するものなら、先に生まれた人間は不幸で、後で生まれた人間は幸福でなければならぬ。さきに生まれたものは無知で、後に生まれたものは賢明でなければならぬ。しかし、このようなく、ふざけた楽観主義者は実はバブル時代の私たち、日本の総国民がそうであった。

なお、今日に至っても反省はおろか無明の海に漂流してないだろうか。
二十一世紀を目前にして、各界にわた

る大人たちの腐敗と無責任な行動に目にするものがある。

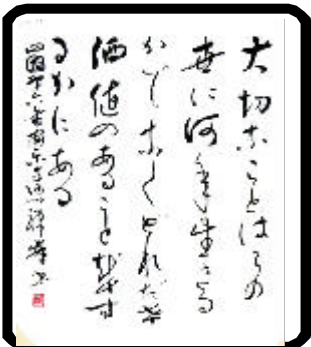
「法華経」の譬喩品(ひよほん)の「火宅の譬え」という話があります。長者の屋敷は門が一つしかない。そんな屋敷が火事になった。火が勢いよく燃え盛っている。子供たちが屋敷内で夢中で遊んでいて、逃げようとしません。

子供たちに突然死が襲っているのです。そこで長者は夢中に遊んでいる子供たちに、子供たちが一番好きなおもちゃ(三車、声聞乘・縁覚乘・菩薩乘)を与えて救う譬えであります。つまり、一番立派な一乗の悟りこそ、われわれが乗るべき車なのだと言っています。

私たちに、財あるものも、貧乏も名譽あるもの無いもの、すなわち貧富貴賤の別なく、人間には死というものが襲ってくるのです。

田中忠雄師はさらにいう「時計の針が進むにつれて、なんちの生命は刻々と失われつつあるのです。この一点から目をそらして、よそごとたわごと、その日その日を送る故に、進歩主義というものが成り立つのだ。そこでは、生死という生命の一大事はぼけてしまつ。今日の急務は、一大事

真理の花たば



大切なことは
この世に何年生きるかでなく、
どれだけ価値のあることを
するかにある」

故畠田禅峰書

前第六番安楽寺長老・大僧正・勲五等瑞宝章
の感覚を文化の上に回復することである。そうでないと学問をしてインテリになれなくなるほど頭が悪くなる。

私は事業挫折後、郷里に帰り色々なビジネスを致しましたが、ある事業家が私の境遇に同情され、国道筋にある、自社の既存の大きな広告宣伝塔の移転作業を仲買受注しました。最後の移転工事に次のような体験がある。

「その一週間前に新しい移転場所に三本柱の鉄塔の基礎坑を掘りコンクリートをいれていた。いよいよ移転工事に朝から夕刻まで雨が降り、当日の夜間工事を決行することになり、現地に着いてみると基礎坑の穴は雨水で一杯、とてもそのままでは工事ができる状態でない。若い責任者が「水準器を取りに帰るときポンプを持ってくる。一時間程休憩して下さい。」と寒く、小雨の中を待つことになり、「気が付いていたのだがね」とぼやいているが、皆、ぼんやり、そんな状態の時、何時も役に立たない気遣って仕事をしている七十歳程の老人が元気な意気のいい大きな声で「ちよっと待った。このままで出来

豊かなまちづくりに参加します！

株式会社 田淵建築設計事務所
無限供給の原理に基づく創造！

代表取締役 木田耕藏
本社
〒640-8287 和歌山市築港4丁目2-1
TEL(073)431-0261 FAX(073)431-3898

明日の装を提案します！

寝装・和装・洋装・総合繊維卸

株式会社 **マスメン**

代表取締役 増田都司夫



本社

〒640-8376 和歌山市新中通2丁目8

TEL (073)424-4466(代表) FAX (073)436-6508

『一瞬静かに一皆の口から』おっさん！出来るか』と不思議に問いかける。おっさん曰く『溜まった水が水平水準器になるんや』皆聞き入る。『水準を合わせただけ雨水を取るのや、二本の鉄柱が組み立てられる。組み立てたら水の入った穴に掘り出した土砂を入れるんや』と続いて『こつするとお大師さんの知恵で乾いた土を入れるよりよく固められる！』皆、納得、小雨の降る寒い中をまるつきり様変わりな元気で明るい作業が行われ数時間で作業を完璧に終える。もし近代機器を使っていたら、この状況の中では徹夜作業になっていたし、チームワークが乱れる結果となっていたらどう。

近代的教育を受けた事が必ずしもよい結果を生むところが最初から悪くなる。役に立たない、無学の老人がもたらした知恵が全てに勝ることを学んだ。

革命といわれる今日、人間が石器を發明し、以来の道具の大發見がコンピューターであり、人間が文字や言葉を發明して以来大發明がインターネットの情報手段であると云われています。

聖徳太子の我が国にもたらした仏教文化、一千五百年以上の年月をかけて日本で磨かれた、佛教が特別の意味をもっているのではありません。

衣食住 (三)

住

最近の高価な新築の家に一階は窓だけ庭を眺める縁側のない事に気がきます。屋根や玄関、畳と幾らか日本伝統の形を残しておりますが、科学技術の進歩と共に実は様変わりしていませんでしょうか。この疑問は素人の私だけでしょうか。

岡倉天心の

茶室の美学



茶の花

天心は周知のように西洋化の波が押し寄せる明治の日本にあつて、日本の古来の伝統と理想を追求しながらも、新しい日本美術の創造に生涯をかけた。

今日の我が国は近代科学の波が打ち寄せ、文化的グローバルイゼーション (globalization) 国際化の中日本の伝統文化が気付かないところで失われている。

茶室は日本の建築だけでなく、西洋の建築にも多大な影響を与えた。近代建築の巨匠であるアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトは、『茶の本』を何気なく読んで深く感動したそうです。茶室の建築様式や形式がいかに変化しようとして、いつまでも変化しない茶室の哲学的な意味をわかりやすく説く。そして、その茶室の哲学は日本独特のものであつて、その独自性を訴えるためにも、西洋建築及び室内装飾とを比較しているのである。

石と煉瓦でどっしりと固定された西洋建築に対し、茶室は木と竹で作られ、まるで掘って立て小屋のようであり、この茶室独自の建物に、禅や道教の「空」または「虚」の概念が表れると天心はいつ。

そのように、茶室とは、はかない無常なものであるが、その茶室を支える精神は永遠なもので、こつとした簡素なただすまいを美しくする精神、不完全を心の中で完全なものにする心が大切だと天心は主張する。

岡倉天心の著書『茶の本』(原本・一九〇六年に『The Book of Tea』と題して出版)立木智子訳

天心は文久二年(一八六二)に横浜で生糸商の次男として生まれた。父親は貿易商で国際感覚を身につける上に理想的な環境で育つ、八歳で米人の経営する英語塾で英語を学ぶ。東京大学入学後は、彼の語学力がかわれ、当時東大で教鞭を執ったアーネスト・フェノロサの通訳として活躍、抜群の語学力を兼ねそなえながらも、同時に彼は日本の文化や東洋の思想にも精通していた。

天心は実は九歳で母を失い、その後は母の菩提寺である長延寺に十歳で預けられた。長延寺ではその住職玄導和尚から漢学を学び、十五歳頃から南画、漢詩、琴曲、そして茶道を習ったという。

このように天心が幼少時から身につけた教養文化には目を見はるべきものがある。今日の日本の住宅を考えるのについて天心の著書を引用して日本の伝統文化、住宅を考えたい。

「茶の本」より

『「好き家」としての茶室
「好き家」という言葉はある個人の芸術的要求にかなう建物を意味します。茶室は、茶人のために作られたものであつて、茶人が茶室のためにあるのではありません。後世に残そうと意図されたものでなく、したがって、飯の家なのです。』



茶室

幸せライフのお手伝い!!

総合建設業

株式会社 酒井技建

代表取締役 酒井武義

〒640-0416

和歌山県那賀郡貴志川町長山277-68

TEL(0736)64-6776 FAX(0736)64-8908



皆さんのスーパー
株式会社 みち屋

代表取締役 道畑 勇

本 部 和歌山市岩橋729番地の6
TEL (073) 473-4197

松 島 店 和歌山市加納246番地の1
TEL (073) 474-3500

貴志川店 那賀郡貴志川町大字北山517番地
TEL (0736) 64-7020

各自それぞれが一軒家を持つべきだといふ考えは、日本民族古来の習慣、つまりどの家も主人が死ねば、家を空けるべきだといふ神道の迷信に基づくものなのです。この習慣には何か知られざる衛生上の理由があるのかも知れませんが、もう一つ古くから習慣として、新婚夫婦には新築の家を用意すべきだといふものもあります。古代においてはしばしば皇居が移されたのもこのような習慣からなのだと思います。天照大神(あまてらすおおかみ)を主神として祀る伊勢神宮が二十一年ごとに建て替えられるのも、このような古来の習慣が現在も引き続き行われているほんの一例に過ぎません。このようなきいたり、日本の建築が木造で取り壊しも組み立ても簡単だからこそ守り続けられるのです。それとは対照的にもつとも永持ちする煉瓦や石造りの建築なら、このような移動は不可能でしょう。実際に奈良時代以降に日本に取り入れられた中国の大型でどっしりとした建築様式では、確かに移動は不可能となりました。

十五世紀に禅の個人主義が広がるにつれ、茶室に見られるように家についての古い考え方が取り入れられ、より深い意味を持つようになりました。

禅は佛教の無常観と共に精神が物質を支配すべきだという教義に基づいていたので、家屋というものを肉体が逃げ込む単なる仮の宿にすぎないとなりました。我々の肉体自身は荒野に建つ一軒の掘つ立て小屋にすぎないのです。それは、まわりに生えた草を編んで作った、吹けば飛ぶような小屋です。草の編み目がほどこけてしまえば再びもとの荒野の土に溶けてしまうのです。このはかなさ、または無常観が、茶室では藁葺きの屋根や、細く、か弱い柱、竹の支えの軽々しさ、そして無頓着そつにつかわれているありふれた素材

などに表れています。

こうした簡素なただすまいに具現されているように、永遠とは、かすかな洗練でこれらのただすまいを美しくする精神にこそ存在するのです。

茶室はある個人の趣向に合うように作られねばならない。これは、ある意味で芸術の活力の原理を実践していることを意味します。芸術はその時代の生活に忠実であつて初めて十分に理解されるのです。それは後世を無視せよということではなく、ただ現在をより豊かに愉しむべきだということなのです。また、それは過去の遺産を軽視せよということではなく、過去を同化して現在の私たちの意識の中で享受されるものにすべきだ、ということなのです。

伝統や法則に単に真似することは建築の個性を失うことになりません。現在の日本に見られるヨーロッパ建築の無分別な模倣には嘆かざるを得ません。西欧の先進諸国の建築さえ、どうして個性なく古くさいスタイルの繰り返しに満ちているのでしょうか。多分我々は芸術の民主化の時代に生きながら誰か巨匠が現れて新しい王朝が築かれることを待っているのでしょうか。それなら模倣せず、古人をもっと尊敬するようになればよいと思つたのですが、ギリシヤ人が偉大であつたのは、過去の遺産を決して模倣しなかつたからだといわれているのです。

抜粋は次号に続く

現世の幸せとは

話は少しそれますが、西暦一五〇〇年代の時点ですでに大陸間の不均衡を生み出した要因はその時点での技術や政治構造の各大陸間の格差からといわれている。ユーロシヤ(ヨーロッパ・アジア)大陸 北ア

フリカでは国家や帝国が形成され、人々は金属製の道具を使う生活をしてきた。産業革命の黎明期にさしかかっていた地域すらあつた。鋼鉄製の武器を持った帝国は、石器や木器で戦つた部族を侵略し、征服して滅ぼすことが、その原因であつた。

紀元前一万一〇〇〇年、最終氷河期が終わった時点で、世界の各大陸に分散していた人類はみな狩猟採集生活を送っていた。技術や政治構造は、紀元前一万一〇〇〇年から西暦一五〇〇年の間にそれぞれの大陸ごとに異なる経路をたどつて発展してきた。

ユーロシヤ大陸の先住民、アフリカ大陸の多くの国では今日でも植民地時代の過去と戦っている。中米、メキシコ、ペルー、ニューカドニア、旧ソビエト連邦、インドネシアの一部の地域では、多くの先住民が侵略者の子孫が支配する政府に対し抵抗運動やゲリラ戦を展開している。南部やアメリカ大陸の先住民、オーストラリア大陸の先住民アボリジニ、ユーロシヤ大陸のシベリア先住民、アメリカ合衆国の先住民、カナダ、ブラジル、アルゼンチン、チリの先住民は殺戮(さつりく)や特に天然痘等による疫病(えきびょう)によって人口が激減して戦える状況でなかつた。近年、次第に権利を主張しつづける。しかも、一世紀前、ニューギニア人は石器時代の暮らしをして

いた。その当時ヨーロッパでは数千年前に金属器にかわつている。白人の入植者はニューギニアの先住民を、原始的だとかからさまに見下した。昨日、今世紀最後のパラリンピックが閉幕されましたが、これらのオリンピックで開会、閉会式でオーストラリア大陸のアボリジニ二人という先住民をはじめて知つた方が多いことと思います。彼らも白人が支配する現代のオーストラ

リア社会で経済的成功を収めることのむづかしさを感じ始めているそつです。

白人をはじめ、先進国の日本の私たちが公には人種差別は否定されていますが、肌の色、風貌、生活文化の違いから、人種差別を無意識のうちに人種差別的(生物学的差別)な説明がないまま受け入れている。

カリフォルニア大学教授ジャレド・ダイアモンド氏のビュリッツァー賞受賞、著書、銃・病原菌・鉄で生物学者としてニューギニアで先住民と生活を共にして、先住民たちは知能が決して先天的に白人に劣ることはない。むしろ平和で優れた知能を持っているといふ。それには二つの理由がある。

一つはユーロシヤ大陸などは人類は疫病との戦いで疫病に対する遺伝子を持っているかどうかであつたが先住民には疫病との戦いは必要なく、自然や部族間の戦いで知能が必要であつたこと。

二つ目は遺伝的なことではなく、アメリカの標準的な家庭の子供たちは一日の大半をテレビや映画やラジオを聴いたりして過ごしている。日本ではテレビゲームに夢中になっている。これに対してニューギニアの子供たちは受動的に楽しむ賢沢に殆ど恵まれていない。彼らは子供たちや大人たちと会話したり遊んだり、自然の森で小動物を含む生物を捕らえることに積極的な時間を過ごしている。このような刺激的な活動が知的発育を促している。彼らの豊かな生活環境は自然にマッチした住居が中心になっている。

私たちの子供時代も全く子供やそこに住む家族が中心の住居であつた。その住居の部屋は茶室の「空」を表現した南向きの明るい縁側の座敷があつた。もつ一度、日本伝統の住居を考えたい。

私のウォーキング

和歌山地方・家庭裁判所所長 中西武夫

近ごろはウォーキングブームのようである。新聞紙上等で「○○ウォーキング」とか「○○歩」などとかの案内をよく目にする。和歌山でも昼の時間はもちろん夕方から夜にかけても和歌山城の周りを歩いている人が多い。特に腕を大きく振ってさっそうと歩く女性の姿が目立つ。昨年は熊野古道が全国的に注目を浴びたことも記憶に新しい。健康といい、スリムになりたい、自然の中を歩いて心を癒したい、古寺を巡りたいなど、歩く目的や場所は人より様々であろうが、とにかくも歩くことにより快適な心身状況を獲得できるのであれば、歩くこと自体にはお金がかからないことでもあるし、「疲れた」と言って一杯飲むのは別として、非常に結構なことである。

私も、当地に来て以来、昼休みにできるだけ散歩しようとして心掛けていたが、それだけではもの足りず、健康管理に加え、単身赴任のむくみ解消、歴史的・美術的・好奇心の満足を兼ねて、休日にあちこち出歩くようになった。私の場合、和歌山はもちろん関西一円の由緒ある神社・仏閣が保有する文化財・博物館・美術館の特別展示祭りの開催等に狙いを付けて、これを見ることを第一に考え、それに合わせて周辺をできるだけ歩くようにしている。最近では、一般の観光案内書、歴史書に加え、ウォーキングブームを反映して古道を紹介した出版物などもかなり出ているし、新聞等に近畿の催しものの紹介記事も載っている。これら情報を収集し、これを自分なりにこなしてコースの計画を練ること自

体、先ず楽しい。

遠方に出るときは複数の目的物をできるだけ効果的に回るようにするし、交通機関があっても歩く時間は少なくても一時間はとるようにする。脚力を鍛えるため登り降りはいとわれない。一歩一歩近づくとときには目的物に対する期待感も徐々に高まるし、現地に立つて往時に思いを馳せ歴史を偲ぶ



国道451号里見峠から見た新十津川、徳富川、遠くに石狩川、さらに十勝岳も望まれます。(中西武夫所長郷里)
<http://www.dosanko.co.jp/sintotsu/album/index.html>

満ち足りた時間は至福の時である。また、昼食は弁当持参なので、どこでもOK。昼食時刻ころになると何処にしようかと探すのも楽しみみの一つ。素晴らしい自然の中での弁当となると最高である。ときには思わぬ場所で昼食ということもある。いつぞやは、熊野古道中辺路の近露あたりを歩いていてもっと見晴らしのいいところを求めてと歩くうちに時機を逸し、お腹も空いてやむなく民家のかわい子犬二匹が物珍しげに遠慮しながら近寄ってきた。また、多武峰に

至る途中の小高い丘に立つ聖林寺の著名な十一面観音を訪ねた際は、お願いしてお寺の縁を拝借したが、三輪山と桜井の町並みを眺めながら弁当の美味しかったこと。

関西には、日本最古の道といわれる山の辺の道、葛城古道、竹内街道等、奈良時代以前から歴史上名高い道が沢山あり、由緒ある古寺、神社が沿道いたるところに散在している。和歌山にも、熊野古道や高野山への町石道等の素晴らしいコースがある。熊野古道といっても、ご存じのようにいろいろのルートがあるが、これまで歩いたのは、大阪天王寺駅前から近ごろブームの阿倍晴明神社や阿倍王子を経て住吉大社近くまでの区間、和歌山市の伊太祚曾(いたきそ)神社付近から海南への古道(ただし自転車走行)、海南の日限地蔵から藤白神社、藤白峠、蓮如上人ゆかりの真言宗福勝寺を経て橋本神社、拜の峠、無坂を越え有田川の宮原橋まで、湯浅町内、牛馬童子から近露を経て継桜王子まで、那智大門坂付近。昨年体験博が開催されたせいか市街地、山間部等を問わずおむね道案内が整備されていて歩きやすい。行く先々の民家の軒先に熊野古道の提灯が下がっており、道に不安があるときにはこれを見つけると嬉しくなる。それでも湯浅町内では大いに道に迷ってしまった。うっそうたる杉林や竹林の中で語りかけてくる道端のお地藏さん、甘い香りの蜜柑の白い花、峠への道の途中で木々の間に不意に現れる海の青さなど、自然の中を歩くときは素直に自然に同化して現世を忘れる。また、資料を読み、実際に現地も訪ねるといろいろなおことに疑問がわいてくる。例えば、伊太祚曾神社(祭神は五十猛命)が垂仁天皇十六年ころ現在の日御宮(正式には日



株式会社 ミヤタケ

代表取締役 宮下隆博

〒640-8329
和歌山市田中町4-119
TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598



人に優しい音声発生装置!

株式会社 日本メディテックス

代表取締役 山口昭昌

〒641-0054
和歌山市塩屋5丁目5番43号
TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696

前宮・国懸神社(に社地を譲って現在の古道沿いの山東の庄に移転したというが、日前宮はなぜ二つの神社が合体しているのか、日前宮の代々の宮司は紀氏であるが古代紀氏はいつごろからどのような活動をしてきたか、右の社地移転は旧来の勢力であったスサノオ、ニギハヤヒ系がアマテラス系新興勢力に対し一種の国譲りをしたのではないが、そもそも神武東遷の際紀川河口では名草戸畔、熊野の神邑では丹敷戸畔が抵抗したというが、これはどのような勢力が熊野三山の真の隣神は誰か、記紀の世界は最近の発掘調査等によっても事実が次第に裏付けられつつあるものの、やはり官編の歴史書であって、事実が改変されている可能性のあることは、つとに指摘されているところ、記載内容はどこまでが真実なのかなど、出てくる疑問には際限がない。目下最大の関心は、山の辺の道沿いの大神神社の際神とされる大物主神とは一体誰かという点にあり、あちこちの神社を巡りながら参考資料を集め自分なりに推理をするのは楽しい。

お寺については、建築様式や佛教に関する興味ももちろんあるが、やはり仏像鑑賞が中心である。以前から関西に来たときには有名古寺にできるだけ立ち寄りてはいたが、遠隔地のお寺は時間の制約があつても行けなかつたので、今回はまだ訪れていなかった遠方の寺をできるだけ選んで出かけ始めた。室生寺を訪ねたときは、台風で損壊した五重塔再建のためあいにく主たる仏像は展覧会出品中であつたが、後日奈良国立博物館で首尾よく十一面観世音等を拝観できたし、初瀬街道の長谷寺、当尾の岩船寺、極楽寺も訪れることができた。御

坊の道成寺に行つて初めて千手観音が最近国宝に指定されたと知つた。しかし、そのうち昔拝観した事のある仏像にも再会したくなつた。現在ではとにかくできるだけ多くの関西の国宝指定仏を拝観したいと思つているが秘仏も相当ある。和泉の観心寺の如意輪観音は年一回二日間の御開帳だし、九度山の慈尊院の弥勒仏座像は二十一年に一度とか。これらは当分拝観できそうにない。

今のところ私の好きな像ベストは、興福寺の阿修羅像、葛井寺の千手観音座像、高野山の八大童子立像(特に「こんがら童子」である。その理由は想像に任せるが、写真等で何度も見た仏たちに対面したときにわき上がる懐かしさ、幸せ感は何ものにも代え難い。そしてこれからもまだまだ素晴らしい像に会えるかもしれないとの期待もある。さしあたり、湖北向源寺の十一面観音は有力候補だ。

そのよつなわけで、和歌山の生活を満喫している。(和歌山弁護士会会報転載)

当・岩屋山のお不動さん



石造不動明王

福勝寺の裏見の滝の岩窟内に石造の不動明王が祀られています。

福勝寺の当山旧記帳(享保九年)には、この不動明王像は弘法大師の御作と記され、その昔、弘法大師が滝本修護摩の本尊とされて

以来、昔から日照りの時には雨乞いのためこの不動様を滝壺の石の座に安置して、祈禱を行つたと記されています。

もともと不動様は如来様の教えに背く者をくじいて、正しく教え導くために大日如来が変身したものだといわれています。

不動様は身を包む炎で悪や汚れを焼き浄めて悪を教化します。

その姿は、顔が怒りの形相で口に牙があり、右牙は上を、左牙は下を向いています。また右目は天を向き左目は地を向いています。これを天地眼といっています。前方の衆生だけでなく、天地間の一切のものを救おうとしています。

更に右手には剣を、左手には綱索(けんさく・綱のようなもの)を持って、もなく救つてくれます。

このように不動様は罪を救つてくれたり、災害、疫病、早魃(そつぱつ)虫損、煩惱などを取り除いてくれるといわれています。

さてこの不動様は名工が彫つたように決して形のすぐれたものでないにしても素朴で、そして見る程に威厳と気品があり思わず居すまいを正すほどです。

そのうち、ふあつと大きく温かい手で抱きしめてくれそうです。

滝壺に滝水が落下する少し手前に横長で平たく青味がかつた石座があります。その石座にこの不動様を安置し、白い祭壇をしつらえ、白一色の香華、菓子、ろうそくを供え、白衣の行者がひたすら祈つたことでしょう。

裏見の滝、不動様、天狗の手形、趣きに富んでいます。

(下津町歴史民俗資料館より)

和



親鸞上人は聖徳太子を、和国の教主と言われたそうです。これは、日本国の釈尊という意味に理解されています。その太子が憲法十七条の冒頭に「和を以て貴し」と言われました。この事は日本国の佛教は「和」という一字に濃縮できるということにならないでしょうか。

ところが「和」とはどついついことかと改めて問われますと、これが分かつたようになかなか分らないものです。聖徳太子の「和」についての考え方が憲法十七条の第一条から三條に隠されていますが、ここでは第一条を通して「和」について考えることに致します。

中村元氏の現代語訳を借用しますと、

一に曰く、和をもって貴しとし、忤(さから)つことなきを宗(むね)とせよ。人みな党(たむら)あり。また違(さと)れる者少なし。ここをもって、あるいは君父に順(したが)わす。また隣里(りんり)に違(たが)う。しかれども、上(あ)げつら(う)に諧(かな)うときは、事(こと)おのずから通(と)す。何事(なにごと)も成(な)らざらむ。

以上が第一条の条文です。

梅原猛が「聖徳太子」で次のように「和」の徳が詳しく考察されています。「和」という言葉を耳にし目にして来ていますが、私たちは「仲良く」という当たり前の意味を深く理解しようよつと勤めなかつた傾向がありました。梅原先生の文書を拝読して、聖徳太子の十七条憲法の根本をなす「和」が最高の徳であり、和を実現することがなによりも大切である。もし、和を積極的に実現できなかったならば、せめて消極的にも実現しなくてはならぬ。そのため「忤(さから)つてはいけない、反抗してはいけない」というのです。

私、自身六人兄弟の長男で、兄弟喧嘩の後、父親から「兄弟は仲良くしなさい。上の者は弟たちに少々のことがあつても辛抱しなさい。」と叱られたことを思い出しました。「人みな党(たむら)あり。また違(こと)とれる者少なし」というのは不和の原因とその結果について述べている。一つは「人みな党(たむら)あり」とは集団を意味し、梅原先生は「ここでは兄弟家族、国家とかを含んでいないのではないか。この言葉からみて多くの氏族の紛争が頂点をきわめよつとしていた。その意味で集団と意味しているのは氏族集団を指しているのではないかとつていて。今日の政治状況でいえば国民を忘れたかのように党利党略の争いに終始している集団といえるのではないか。集団あるところには集団の「エゴイズム」がある。儒教は集団「エゴイズム」を抑制しながら、一面では奨励もしている。もう一つは「また違(こと)とれる者少なし」といふことである。

当時の日本国は、ただ相争つた氏族の集

合体で、統一国家ではない。聖徳太子は、

日本国を仏教精神にみちた文化国家にするとも、強い武力を持つた統一国家にしよつとしていた。「ついで太子にとつて、党の悪として、氏族集団の悪が第一の悪としてつたことを考えると「あるいは君父に順(したが)わす。また隣里(りんり)に違(こと)う」という言葉の意味も理解される。当時もそうであつたように今日でも悪の根元は金銭がほしい、権力がほしい、名誉がほしい、異性がほしい、という人間の「エゴイズム」で古今東西、この四つの行動で説明できる。過去の「ファシズム」の国家や新宗教教団の中にはその内部には忠誠を誓わせ、ある種の道徳を強要するが、その外部に対しては、この集団「エゴイズム」を抑制するものを何もたない。内部にある種の道徳をもつだけ、外部には抑制のない「エゴイズム」がそのまま通用する。そしてこの集団は一つの世界観を強要するが、その世界観はいつも歪んだ眼鏡なのである。集団集団の利益という歪みがその眼鏡に仕かけられて、その眼鏡を通して世界を見る人はその歪みにまったくといつていいほど気づいていないのである。と考察されている。このような歪みに迷わされなために佛教の「ついで」の自覚が大切であります。

「上和ぎ、下睦(むつ)むつ(びて)、事を、論(あ)げつら(つ)に諧(かな)つ」
ここで太子は和の状況について、上下つまり君臣が和睦(わはく)して、和気あいあいのうちに、事を話し合つた。そうすれば集団はつまく運営される。それが和の状況である。

「事を、論(あ)げつら(つ)に諧(かな)つ」

つまり太子は、ここで民主的会議・民主的な話し合いの精神を勧めています。「この言葉は智の徳を説かれています。大きな事を決めるには衆とともに話し合つたことを勧めています。この事が「和」であつて、「和」なしには十分議論が行われないし、議論が十分行われないうちに間違いが生じやすい。「和」の徳は「智」の徳につながっていることを聖徳太子は知っていたのであり、「和」の徳は「智」の徳につながっていることを語つておられるのです。

「事理おのずから通す。何事が成らざらぬ。」事理とは、事のわけ、物事の道理という意味であるが、なによりその言葉は佛教で説かれる言葉である。事というのは因縁によつて生じる現象(留まらず常に移り変わる現象)と理(不生不滅の真理、佛教とくに「涅槃経」、「法華経」)の眞理、佛教では、この事と理、現象と本体すなわち実在は一体であり、事を離れて理はなく、理を離れて事はなく、理はそのまますで、事はそのまま理であるといふのです。佛教でいう事、すなわち現象と理すなわち実相(本体・実在の相)がどのようなものであるか明らかである。世界を認識することとは、世界の本体を知ることと共に、その現象を知ることでありませう。

この本体・実相を知り、その現象がどのようなものかを知ること。このように十分に事を論じてこの本体・実相を明らかにすれば、すべてのことが明白となると聖徳太子は明言されているのであります。

のものが大切であることが説かれている。

よく読んでみると、「和」とは、「お互い至つないものである」といふ自分を見つめることに始まつて、「事は独りで決めてはならない」と思ひ、衆と共に事を論じ、意見を尽くす「ついで」と考える。そこにわすかではあつても自分を越えたより高い世界が生まれてくる。そこが「和」の世界である。その「和」こそ貴いと太子は言つているのではないだろうか。これこそ深い佛教的人間観に裏付けされた言葉なのだと思ふことができる。

弘法大師の思想すなわち生かされているが故に「仏である(即身成仏)」。そうであるから人間は人の苦しみや難題に、人の考えにもよく耳を傾け朗らかによく話し合つた事を家庭内から始めようではないか。

編集後記

今年(平成12年)は六十四歳で高野山大学に聴講生として学生と一緒に学ぶ心地よき。通学途中の高野の山並み、入学時は山桜にウグイスの囀り、今は柿が色づく山に、全山紅葉も直ぐそこに来ている。授業は「現代社会と密教」日清日露から第二次戦争まで、伝説佛教は、密教は国家に戦争にどう関わつてきたかを反省の心で問つた。

七〇年代にアラビア数字表示音を開発、中近東向けに電卓を輸出、当時国際のマスコミで大変な評価を受ける。中近東の大使館、領事館を訪問、イランの五の数字だけが少し異なる形(こと)を知る。政治文化の難しさもそんなところにあるかもしれない。年のせいだろうか、人種、男女、の問題に伝統佛教がどう関わつてきたか気になる。

「スーパーみちや」の創立十周年記念式典に招かれた。専務が社長の奥さんへの感謝の花束と社長の奥さんのお母さんへの感謝の花束、繁米の裏方に感謝する行為、そんな優しい心遣い、お客への心遣いが分かる思いがした。 弥栄！

この度、郵便局主催のパソコン教室に講師で十一月十四、十五、十六日に出向。 合掌